

## 新相撲の現状と今後の課題

### The Assignment for Shin-Sumo

下川隆司\*, ニッ森修\*, 屋田敏弘\*, 小山泰文\*,  
古谷洋一\*, 佐藤和裕\*\*, 下川学\*\*\*, 下川哲徳\*\*\*\*

Takashi SHIMOKAWA\*, Osamu FUTATSUMORI\*, Toshihiro OKUDA\*,  
Yasufumi KOYAMA\*, Youichi FURUYA\*, Kazuhiro SATO\*\*,  
Manabu SHIMOKAWA\*\*\* and Tetsunori SHIMOKAWA\*\*\*\*

#### Abstract

Seven years have passed since Shin-Sumo started in Japan. But it strikes serious problems now. Shin-Sumo has tried to achieve two purposes. one is the purpose for participation in the Olympic Games and the other is the purpose for participation in the National Athletic Meet. However, those players of Shin-Sumo does not increase in number and Shin-Sumo hasn't become a popular sport yet. We consider how to maintain Shin-Sumo by analyzing about the present of Shin-Sumo. We think it is important to go back to the basics of Shin-Sumo and to bring up superior players steadily..

#### はじめに

日本新相撲連盟が発足し、新相撲という新しい競技が始まって7年になるが、この間、地方大会や全国大会、また世界選手権大会も開かれるようになり、順調に発展していっているように見えるが、競技人口の拡大は思うように進んでいないのが実情である。また、それ以前の問題として、新相撲そのものがまだ一般にあまり知られていないという問題もある。

新相撲の発足当時は、オリンピック出場と国民体育大会への参加を目指していたが、現状ではオ

リンピック出場、国体への参加も依然厳しい状況である。

当面、大きな目標を失った新相撲は、今後、どのように進んでいったらよいのか、現状を踏まえて検討した。

#### I. 新相撲の現状

新相撲が発足したのが平成8年(1996)のことだから、今年で丸7年を経過したことになる。そもそも新相撲がスタートするきっかけとなったのは、2008年のオリンピックの大阪招致を機に、

\* 国士館大学 (Kokushikan University)

\*\* 道都大学 (Dohto University)

\*\*\* 東京純心大学 (Tokyo Junshin Women's College)

\*\*\*\* 杏林大学 (Kyorin University)

相撲を正式種目に採用してもらおう狙い（オリンピックの種目は男女とも競技することが原則）と、国民体育大会（国体）への出場という二つの大きな目標があったからだ、周知のとおり、大阪へのオリンピック招致は実現しなかった。また、国体への参加もいまだ検討段階で、いつから参加できるかという明確な見通しは立っていない。

しかし、新相撲がスタートした当初は、女子も男子と同じように土俵で相撲を取るという話題性ととも、オリンピックの出場を目指して稽古に励む選手たちの意気込みなどから、新相撲が新聞やテレビなどマスコミでしばしば取り上げられ、いきおい選手たちの稽古にも熱が入った。

全国大会や地方大会も行われるようになり、個人戦や団体戦が繰り広げられるようになった。全国から強豪選手が集まって毎年大阪で行われる「全日本新相撲選手権大会」は今年で8回を数える。また、関東以北の大学生による「東日本学生新相撲選手権大会」は今年で4回目を迎えた。平成12年（2001）、青森県弘前市で男子の世界相撲選手権大会が開催され、この年から新相撲の世界選手権大会も同時に開催されるようになった。こうして、新相撲の大会が種々開催されるようになったことは、大会参加の機会が増し、競技人口の拡大にもつながるものと期待された。

ところが、もっとも大きな目標であったオリンピック出場の機会が実現しなかったことで、選手たちの間に失望感が広がったことも否定できない。スポーツ競技としては社会的認知がゼロに等しかった新相撲にあえて取り組んできた選手たちの多くは、まったく新しいルールを学びながら稽古に励むとともに、周囲の好奇の目を払い除け、社会的認知を得るよう努力することも強いられていたのである。

東日本相撲選手権大会の個人戦で優勝したある選手が、私（筆者）にこう言ったことがある。「私が新相撲をやっていることを家族は知らないし、恋人にも言っていない」。私はそのとき、「優勝したのだから、自慢できるではないか」と

言おうとしたが、グッと言葉を飲み込んだ。本人にとって事はそう簡単ではないのだ。女性が相撲を取るということは、一般的にはまだまだ特異なものと受け取る人が多いのである。

先日テレビのニュース番組で、キャスターが「海外から珍しい映像が入りました」と、ヨーロッパで行われた新相撲の試合の様子を紹介する場面があった。そして、大きな体格の選手同士が激しくぶつかり合う映像が映し出され、解説者が初めて新相撲を見るかのように「ちょっと怖い感じがしますね」とコメントを述べた。残念ながらマスコミ関係者の間でも、新相撲の認識はこの程度なのが実情である。

しかし、新相撲がオリンピック種目となれば、話は別となる。新相撲の社会的認知は一気に高まり、出場選手には国を挙げて声援を送ることになる。テレビで試合が映し出されれば、視聴者は男子の相撲と変わらぬ相撲ならではのスピード感と迫力に魅了されることだろう。国技として長い歴史を持つ相撲のことだから、日本の選手が活躍すれば、女子柔道を凌ぐ人気さえ期待される。もちろん、競技人口も増えることは間違いない。

同じ格闘技である女子レスリングは、平成16年（2004）のアテネオリンピックから正式種目となり、選手たちは金メダルを目指して、練習にもいっそうの熱がこもっている。また、オリンピックの代表権をめぐる目下、熾烈な戦いを繰り広げている。長年の夢であった女子レスリングのオリンピック参加が決まり、上位入賞も期待されることから、関係者の間でも大きな盛り上がりを見せている。こうした盛り上がりをもマスコミも見逃すはずはなく、すでに女子レスリングの連載を始めた新聞もある。マスコミ攻勢が激しすぎて選手の練習に影響するとして、規制すべきではないかといった声も出ているほどの過熱振りである。

さらに、オリンピック参加によって女子レスリングに追い風となったのが、大学の動きだ。存在感を示す絶好のチャンスとして、全国から選手を募り、強化に乗り出す大学が現れたのである。

このように、オリンピックの正式種目に採用されれば、その効果は計り知れないものがあるが、新相撲がその願いを叶えられなかったことは、誠に残念なことだったと言うほかない。

国体への参加も、新相撲のスタート当初から検討されており、一時は平成18年（2006年）の開催に向け具体的な準備が進められたこともあり、近い将来実現することは間違いないと見られていた。

しかし、今年の相撲連盟の協議で、新相撲の国体参加は継続審議とされ、国体参加の具体化は一歩後退することとなった。この背景には、国体の全体的な縮小という流れがある。男子の相撲競技の参加人員も、現行の611人から470人に削減されることがすでに決まっている。しかし、それ以上に大きな理由は、予想した以上に新相撲の競技人口が増えないということにあると思われる。国技とされる相撲のことであるから、競技人口が増えれば、男子とともに新相撲が行われるのは、自然の流れであろう。要するに、競技人口が増えれば国体への参加も実現することになるが、他方、国体へ参加できれば競技人口が増えるという、競技人口の拡大が先か、国体参加が先か、まさに新相撲は深刻なジレンマに陥っているように見える。

新相撲とはやや趣が異なるが、国士舘大学体育研究所報第19巻の『新相撲の開催とその隆盛～北海道の二つの女相撲大会を見て～』で紹介した北海道弟子屈町の川湯温泉全道選手権大会は今年をもって32年の歴史にピリオドを打った。仮設とは言え本格的な土俵で女性が相撲を取る大会で、その規模と歴史の長さは例を見ないものであった。

しかし、近年参加者が減少し、さらに景気の低迷もあって、幕を閉じることとなった。参加者の減少の理由は定かではないが、一地方で選手を募って開催するには、不景気な昨今、主催者にとっても大きな負担となってきたのではないかと推察される。また、川湯温泉は昭和の大横綱・大鵬を生んだ土地であるが、大相撲の人気低迷も無関係とは言えないだろう。

この大会を手本として北海道福島町で始まった

南北海道・女だけの相撲大会は、今年の5月に第13回目の大会が盛大に開かれた。「福島町のイベントとしてすっかり定着しており、とくに参加者の減少も見られないので、今後も続けていく」と関係者は話しているが、「弟子屈町の大会が中止となったのは残念だ」と落胆の色も隠さない。

新相撲は女子によるまったく新しいスポーツ競技であるとはいうものの、そのルールは大相撲と変わらない。プロである大相撲とはあくまでも一線を画するのは当然であるが、大相撲とまったく無関係かと言えば、それも無理があり、少なからず影響を受けるのはやむをえない。とすれば、大相撲の人气が高まれば、新相撲への関心の高まりも期待できることになるが、大相撲はいわゆるスター力士の不在や実力が伯仲する強豪力士の好カードが少なくなったことから、人气が低迷している状況である。

このように、新相撲を取り巻く環境は非常に厳しく、大きな曲がり角を迎えていると言っても過言ではない。今後、この厳しい状況をどのように乗り越えて行ったらいいのか、新相撲の関係者は真剣に取り組まなければならない「待ったなし」の段階に立たされていると言える。

## Ⅱ. 格闘技として見た新相撲

格闘技はもっとも素朴な競技であり、これまでとはどちらかと言うと男子の競技と捉えられてきた。しかし、男女平等・機会均等が叫ばれるようにな



り、女子も積極的に格闘技を楽しむようになった。とくにヨーロッパでは、柔道やレスリングが盛んで、数多くの大会が開催されている。また、アメリカを中心として、女子によるボクシングさえ行われるようになった。

国技である相撲も男子の行うものというのが一般的だが、相撲という語源が女子の行ったものに由来することからも想像できるように、我が国では女子の相撲も古くから行われてきた。このことは、国士舘大学体育研究報第18巻・『新相撲の発足と今後の課題～女相撲の歴史を踏まえて～』でも指摘したとおりである。

わんぱく相撲（ちびっこ相撲）に限って言えば、男子に負けないくらい女子も多く参加し、実際に相撲を取っている光景は全国各地で見られる。

このように見ていくと、女子で格闘技を行いたいと思っている人たちの数は、潜在的には非常に多いと思われる。したがって、それらの人たちを掘り起こし、新相撲の世界に呼び込むためには、どのようにしたらよいか、それがもっとも大きな課題だと思われる。

新相撲の大会に参加する選手の多くは、大会が近づくと、柔道や剣道といった他の格闘技の選手に呼びかけて、大会に参加してもらっているのが現状である。そのため、試合中에서도、新相撲のルールに慣れないせいか、仕切りや立ち合いで行司から注意を受ける場面も見られる。もちろん、こうしたことは非難すべきことではないし、これがきっかけとなって、新相撲の世界に入る選手が出てくれば、むしろ歓迎すべきことである。

ところが、こうした選手に混じって、仕切りから試合終了まで堂々とした動作をこなす選手もいる。これらの選手のほとんどは、相撲が好きで、誰から進められたわけでもなく、新相撲の競技に飛び込んできた選手たちである。大学に新相撲のクラブがあるからという理由で、その大学に進学する選手もいる。また、大学

に新相撲のクラブがなくても、男子の選手に混じって稽古をして、大会には一人で参加する、「根っからの」相撲好きの選手もいる。これらの選手は、マットの土俵では飽き足らず、あくまでも男子と同じ土の土俵で相撲を取りたがるほどである。

こうした選手を見ると、新相撲に接する機会さえあれば、新相撲の世界に入ってくる選手も少なからずいるのではないかと思われる。

前述したように、女子レスリングは来年のアテネオリンピックから正式種目となり、選手の強化など着々と準備が進められている。しかし、ここに至るまでの道程を見てみると、女子レスリングも決して平坦ではなかったことが知れる。女子レスリングをオリンピック種目に採用してもらおうという話が持ち上がった当初、関係者の間では、「格闘技と言えば、日本では、古来、相撲や柔道が根付いているから、むずかしいのではないか」という悲観的な声が聞かれたことが、その間の事情をよく物語っている。

レスリングの場合、すでに男子はオリンピックの種目となっていたこともあって、日本でも古くから各地にクラブチームができ、少年たちがレスリングと取り組んできた。そして、少年時代から鍛えた技を、高校・大学へ進学し、さらに磨きをかける環境が作られていた。クラブチームの指導者の多くは、かつて自分がオリンピックの出場を目指してレスリングに取り組んできた人たちであることも特筆すべき点である。その情熱を社会人になっても失わず、自ら果たせなかった夢を選手

女子レスリングの状況（数値はすべておよその数値）

クラブチーム数	150
クラブチーム所属の人数 うち女子の人	2000人 (750人)
試合に出場する女子選手の人数 上記に含まれない女子選手の人数	150人 (150人)

の育成にかけているのである。レスリングの大会は、地方大会や全国大会、さらにアジア大会や世界大会も目白押しで、日頃の練習の励みにもなっている。

しかし、これらの環境ももともとは男子の選手が中心だった。ところが、今から20年前の昭和59年（1984）、それまでヨーロッパで盛んだった女子レスリングに日本の選手も参加させる方針が出されてから、女子レスリング選手の育成も急速に進んだ。もちろん、これには、それまで培われてきたレスリングの環境が幸いしたことは言うまでもない。レスリングのクラブチームに女子も数多く参加するようになったのである。とは言うものの、その翌年、女子レスリング国際選手権大会に初めて参加したのは、柔道の選手から急遽起用した選手1名のみで、結果は芳しいものではなかった。

しかし、これがむしろ発奮材料となり、レスリング協会挙げての女子レスリングの支援体制を作り上げ、協会が一丸となって、選りすぐった個々の選手を一人また一人と、文字通り手塩にかけられるように、女子レスリング選手の育成を図った。同時に、高校や大学にも女子レスリング部が作られるよう、働きかけを行っていった。

こうした地道な努力が実を結び、オリンピックで金メダルに手が届くまで女子レスリングの選手層は厚くなったのである。

### Ⅲ．新相撲の課題

こうした我が国の女子レスリングの道程と新相撲のそれを重ね合わせて見ると、新相撲の環境はあまりに貧弱としか言いようがない。

まず、クラブチームの比較であるが、相撲のクラブチーム（道場）も全国各地にある。しかし、そこに女子が参加していることは皆無とっていい。指導者自身が新相撲に対して関心がなく、また、せっかくクラブチームがあっても、新相撲連盟から女子を参加させるよう働きかけるということもないのが現状である。地方のクラブチームの指導者の中には、いまだに相撲は男子の行うもので、女子が土俵の中に入ることさえ嫌う人さえいる。これは、大相撲の習慣から来ているが、こうした「ねじれ現象」は、新相撲の普及に対して少なからぬ逆風となっていることは否めない。現状では、国技館で新相撲を開催することは望むべくもないが、仮にそれが実現すれば、女性が相撲を取ることに對する旧来の偏見も一気に払拭されることになるだろう。

小学生以下を対象とした少年相撲大会でも、わんぱく相撲を除けば、女子の参加を配慮した大会は見られない。この点も、レスリングと比較すると、日本レスリング協会がいかに女子にも配慮しているかが分るのである。

男子への指導と女子への指導では、おのずから

#### 平成15年度全国少年レスリング選手権大会要綱（抜粋）

##### 10競技規則及び競技要項

（2）試合時間【幼年の部】 1分00秒（30秒） 1分00秒

【小学1～2年生】 1分30秒（30秒） 1分30秒

【小学3～6年生】 2分00秒（30秒） 2分00秒

（3）幼年の部・1～2年生はフォールをとらない。

（5）幼年の部・小学1年生・2年生の部は、男女の区別はしない。

（6）小学3～6年生の女子で、希望する者は男子の部に出場することができる。ただし、男女の両階級に出場することはできない。

指導方法が違い、指導者は新相撲の指導に戸惑うのも確かである。それを克服するために、日本新相撲連盟がクラブチームの指導者を集めて講習会を開いたり、ときには指導者を派遣することも考えるべきであろう。もちろん、それには、新相撲連盟自身が各地のクラブチームを連携を取り合う協力体制を図ることが前提条件となる。

女子レスリングのように、世界に通用する一人の優秀な選手を育てることが、選手の拡大につながるということから、クラブチームの指導者の子女を積極的に新相撲の選手に育成するよう働きかけることも一考である。また、自ら新相撲の世界に飛び込んできた「根っから」の相撲好きの選手というのは、周囲でもすぐに見分けることができるので、これらの選手を強化選手に選拔し、新相撲連盟が責任をもって重点的に強化に取り組むことも重要であろう。そして、これらの選手が実践を離れても新相撲の世界からは離れないよう、将来は優秀な指導者になるよう育成することも心がけるようにしたい。

学校における新相撲部の創設も、選手拡大のもっとも重要な課題のひとつであるが、高校以下の学校で新相撲部が設けられているのは、皆無といっている。小さいときから「根っからの相撲好き」の女子が、中学に進学して相撲を続けたいと思っているが、新相撲部がなく、やむなく断念しているのが、現状である。大学に進んで、念願の相撲に取り組む選手もいるが、それも男子の相撲部の選手に混じって稽古をする選手も少なくない。しかし、本来、格闘技は子供のときから鍛えてこそ、上達し強くなるもので、そうした環境がなければ、優秀な選手が育たないことになる。

このことは新相撲に限ったことではなく、男子の場合も当てはまる。以前なら小学校や中学校の校庭の隅に土俵が設けられていたのも、決して珍しいことではなかったが、今ではむしろそうした学校の方が珍しくなっている。当然、中学や高校からつぎつぎと相撲部が姿を消し、部員の数も減少傾向にある。

この傾向に拍車をかけているのが、指導者不足である。相撲の指導者は、自ら相撲経験者であることが望ましいが、年々教員の門戸は狭くなり、相撲経験者が教員になるには、ますます敷居が高くなっているというのが実情である。

学校における男子の相撲部についても、このような現状であるから、新相撲部の創設は並大抵のことではない。特に歴史の新しい新相撲の指導者不足は深刻である。新相撲のルールは男子の相撲とまったく同じだといっても、指導者はやはり新相撲の経験者が望ましいことは言うまでもない。指導者はなによりもまず、新しい競技である新相撲に対する理解と熱意が要求されるが、それにはやはり新相撲の経験者がふさわしい。

これを解決するには、新相撲連盟が一丸となって、指導者の育成に取り組むことが必要となってくる。

優秀な成績を残した新相撲選手の母校に的を絞って、新相撲部の創設を働きかけることが、案外よい結果をもたらすかもしれない。つまり、ピンポイントで候補の学校を選び、重点的に働きかけるのである。その際、その選手には指導者の補佐役を勤めてもらうようにするが、それには、新相撲で活躍した選手を優秀な指導者に育成することが前提となる。また、新相撲連盟挙げて、その新相撲部を継続的に支援し、優秀な選手を積極的に海外に派遣することも考えていくべきだろう。

新相撲はまだまだ一般にはなじみの薄い競技であり、できるだけ多くの機会を設けて、一般の人に見てもらおうよう心がけることが必要になってくる。そのためには、全国各地で数多く開催されている相撲大会では、世界相撲選手権大会のように、可能な限り男子と同時に開催できるようにすることも、新相撲にとって大きな成果をもたらすことだろう。これは、柔道やレスリングではすでに一般的になっているが、国内の相撲大会ではまだ行われていないのが、なんとも不思議である。大会に出場する機会が増えれば、選手にとっても練習の励みになる。

女性による相撲大会である北海道弟子屈町の川湯温泉全道選手権大会は、今年でその長い歴史に幕を閉じることになったことは、前述したとおりであるが、新たに北海道福島町の大会を手本にして、女性だけの相撲大会が新たに開かれるようになったところもある。これは岡山県上斎原村の「女相撲大会」で、毎年5月1日の村祭りに合わせて開催され、今年で5回目を迎えた。上斎原村は特別大相撲の有力力士とつながりがないが、以前神社で行われていた奉納相撲を復活させるに当たって、女性による相撲の方が人気を得るのではないかと、始められた。40人ほどの参加者が、神社の境内の土の土俵で熱き戦いを繰り広げるが、今年はこの大会の優勝者が福島町の大会に出場し、福島町の大会でも優勝するというレベルの高さを見せた。

これらの相撲大会は地域のイベントの一環として開催され、参加者も特別に相撲の稽古に励んで出場しているわけではないので、新相撲とはその性格が異なっているが、こうした大会が各地で開かれ、互いに交流試合を行うようになれば、女性による相撲の裾野を広げるという意味で、新相撲に対してもよい影響を与えることになるかもしれない。

## おわりに

新相撲の魅力は、男子の相撲同様、勝負が一瞬で決まるスピード感と、肉体と肉体がぶつかり合い、必死に投げや押しの応酬を戦わせる迫力にある。しかも、ルールは単純だから、競技に参加することはさほど困難ではない。そして、競技に参加すれば、さらにその魅力は倍増することだろう。強くなるためには、相撲独特の稽古が必要となるが、それだけに奥が深い競技でもある。

私達は、新相撲発展なくして、相撲の発展はないと確信している。我が国で最も長い伝統と歴史を持つ相撲の原点に立ち返り、選手の育成とともに、この魅力を、広く一般にアピールし、格闘技の好きな女性を新相撲の世界に取り込むよう、いっそうの努力が望まれる。

## 引用・参考文献

- 1) 下川隆司、二ッ森修、屋田敏弘、小山泰文、古谷洋一、佐藤和裕、下川学、下川哲徳：新相撲の発足と今後の課題、国士舘大学体育研究所報第18巻、1999
- 2) 下川隆司、二ッ森修、屋田敏弘、小山泰文、古谷洋一、佐藤和裕、下川学、下川哲徳：新相撲の開催とその隆盛、国士舘大学体育研究所報第19巻、2000
- 3) 月刊武道8月号、2003、日本武道館
- 4) 月刊武道9月号、2003、日本武道館